

原 著

心の病がある人とその保護者が抱く親なきあとの不安についての考察

三城大介

A study of anxieties that people with mental illness
and their parents hold after death

Daisuke MISHIRO

心の病がある当事者と保護者が、親なきあとについて感じている不安について、半構造化した質問紙による調査を実施し、ストラウス・コービン版GTAを使って分析した。その結果、保護者が健在なうちに当事者と保護者、そして援助者の3者による関係を作ることの必要性が示唆された。

キーワード: 親なきあと、心の病がある当事者、保護者、GTA

1. 問題の端緒

心の病のある当事者とその親（保護者）にとっての地域生活を送る上で憂慮すべきことのひとつとして、親なきあとに心の病がある当事者が地域生活をどのように継続するかという課題が挙げられる。

それは、大分県内を活動の拠点としている「大分精神障害者就労推進ネットワーク」という任意団体のこれまでの活動からもこのことがうかがわれる。

大分精神障害者就労推進ネットワークは、発足から8年目を迎える任意団体で、筆者はその発足準備から携わり、発足以降副代表を務めている。

このネットワークは会員数が286名（2014年6月現在）で、会員からの会費（年額1000円）を財源とした自主的な活動を旨としている。

その活動は、精神障害者の就労や生活に関する国内外の先進地域の調査分析とその情報の発信、大分における就労支援モデル（大分モデル）の提言、県内の精神障害と就労についてのニーズ分析とそれに基づいた生活支援マニュアルの作成配布、行政へのオンブズマン機能を中心に展開してきた。

これまでに、大分地域のニーズ分析に基づいて発行したマニュアルは、心の病を持つ当事者の就

労と就労継続についての理解と情報提供を目的に当事者とその家族を主な対象とした就労支援マニュアル「支援があれば働ける」や、精神障害者雇用の促進を目的に事業主を対象とした「就労支援マニュアル」、施設や医療機関などで働くワーカーを対象とした「なりたい自分を支援する」がある。

このネットワークの会員や大分県内の精神障害者家族会の会員などから、親なきあとについての当事者支援マニュアルを作成して欲しいとの要望が多数寄せられた。そこで、心の病がある当事者とその家族が抱えている親なきあとの不安について調査し、心の病のある当事者とその家族、支援者が、親なきあとについて如何に考えるべきなのか、その事を考えるきっかけになれるようなマニュアルを刊行することにした。

この論文は、その調査結果をまとめたものであるが、調査の過程で心の病がある当事者と保護者双方のライフイベントを通じて様々な葛藤などが明らかとなった。そのため、こころの病がある当事者とその保護者が、それぞれのライフイベントの中でどのように良好な関係を築くことができるのか、そのことについて何らかの示唆を提示する目的でこの研究を行った。

この研究の端緒は、ここまで述べてきたような

当事者の保護者の声であった。

我が国の当事者やその保護者の団体の多くは、1960年代に創設されている。精神障害者とその家族によって組織された全国障害者家族会連合会も1965年に創設されている。現在、全家連は2007年に解散し、全国精神保健福祉会連合会などが活動を継承している。こういった当事者団体や当事者家族の団体は、若い世代の加入率が下がり高齢化している状況が押しなべてうかがわれる。そういった中で、保護者から親なきあとについて案じる声が出るのは当然のことと思える。ましてや、知的障害に関する親なきあとについての先行研究は散見されるが、心の病がある当事者とその保護者の親なきあとについての研究はほとんどされていないので、なおさらであろう。

そこでこの研究では、地域で生活する当事者と保護者の関係性、特に保護者が不安に感じている親なきあとに備えて親子関係の良好な関係性に着目する。

2. 分析の視点と先行研究

(1) 心の病を持つ当事者親子のアイデンティティの担保の重要性

この調査分析は、親なきあとを不安に感じている多くの保護者からの親なきあとを考えるきっかけになるマニュアルについての要望からはじまった。

親が子の行く末を案じるのは、親として当然のことである。

研究の視点としては、抽出されたデータが心の病に起因する心の病を持つ当事者とその保護者だけの事柄なのか、この行く末を案じる保護者すべてに共通することなのかを精査しながら分析することが必要だと考えた。そうでなければ、分析が抽象的かつ対象がぼやけてしまう恐れがある。

このことを、意識しながら心の病がある当事者と保護者が感じている、もしくは、かつて感じていた生活に関する不安について分析を行った。

(2) 不安についての先行研究の状況

心の病がある当事者やその保護者が感じている、もしくは感じていた生活についての不安を対象にした研究は、ciniiなどで検索したが見当たらなかった。しかし、生活に関する不安についての研究論文は散見された。検索に使ったキーワー

ドは「心の病」「保護者」「生活」「不安」「精神障害(がい)」「精神疾患」「親なきあと」「死後」「他界」「老後」「高齢化」「加齢化」を組み合わせ検索した。

近藤ら(2008年)は、「精神障害者の退院を支援するグループ・アプローチに関する研究(第1報)」のなかで、退院後の生活イメージを具体化するプロセスを6段階に分けて分析し、退院後の生活不安が、就職と継続、生活費の少なさ、住居確保の難しさ、社会の偏見、一生続く服薬、精神疾患の治りにくさから構成されているとしている。このうちの生活費の少なさや住居確保の難しさは、保護者が居ればたやすく対処できることが想像できる。

また、板山ら(2013年)は、「精神障害者および精神保健福祉に対する地域住民の思いに関する記述的研究」の中で、相談支援体制を充実させることと、障害者を支える家族支援の必要性を示唆している。

この研究では、心の病がある人とその家族に対して地域が積極的に関わっていくことで、保護者が心の病がる当事者を抱え込んで孤立することが無いような支援体制の必要性にも言及されている。

心の病のある当事者家族が社会的に孤立し、保護者が当事者を抱え込んでしまうことについては、天谷ら(2003年)が「社会的ひきこもり青年を抱える家族の課題認識に関する研究」の中でも言及している。

天谷らはこの研究の中で、ひきこもり青年を抱える家族の課題を整理する中で、家族自身の老年期までの課題として、親が他界するまでに「橋渡し機能(青年期の子どもを社会に送りだしていく家族の機能)」の重要性を指摘している。

これらの先行研究から、保護者が心の病のある当事者を抱え込まずに済み、親なきあととは社会に当事者の支援の中心が移行できるように、親が健康なうちから、当事者と保護者、そして支援者が意識する必要があると思われる。

3. 方法

(1) 研究対象

本研究は、「親なきあとマニュアル」作成のための事前調査を目的にしたものであるため、調査

対象は大分県内に居住する心の病のある当事者とその家族、支援者とした。しかし、悉皆調査や精神保健福祉手帳所持者や自立支援医療の利用者からのサンプリングは、個人情報保護法などにより不可能なため、大分精神障害者就労推進ネットワークが県内の精神障害者家族会、精神障害者福祉会連合会、精神科病院協会に加入している精神科病院・クリニックに協力を要請し、受諾した団体や医療機関、施設で実施した。

(2) 調査方法

調査方法は、半構造化した質問紙を作成し、調査協力を受諾してくれた団体や医療機関、福祉施設内へ配表留置の方法をとった。

記入者の人権やプライバシーに充分配慮し、記入した質問紙が他者の目に触れることが無いよう施錠された回収箱を設置し、大分精神障害者就労推進ネットワークの事務局メンバーが直接回収した。また、質問紙には、倫理的配慮として、調査の目的や人権に関する配慮について記し、同意を得たうえで記入をしてもらうように配慮した。

調査期間は、2014年9月1日から11月30日の間で実施した。

質問項目は、Table 1にあるように、4項目を設定した。質問紙には、この4項目については、すべて回答欄だけを設定した自由記述とした。

Table 1 質問項目

- ①あなたの立場を教えてください。
- ②「親なきあと」を心配する声がありますが、あなたはどのように思いますか？あなたが感じることを教えてください。
- ③いまあなたが願うことを教えてください。
- ④その他で気になることがあれば教えてください。

配表数は1266枚で、回収できたのは304枚、その中でデータクリーニングをし、データとして使用したのは202枚であった。

なお、対象者の属性はTable 2に示した。

Table 2 調査対象者の属性

	両親もしくは両親 のどちらかが存命	両親とも 他界	総数
当事者	48	52	100
家族			67
支援者			35
その他			0

N=202

(3) 分析方法の選定

本研究では、大分県内に住む心の病がある方とその家族、支援者を対象に半構造化された質問紙によって、親なきあとの不安を明らかにしようと考えた。そこで、質問紙によって得られた言語データを、文脈を考慮しつつ切片化し、それらをコーディングし概念を抽出した。

心の病を持つ当事者の親なきあとについての不安に関する概念と保護者のそれが、相互に作用しあっていることが予測されるため、概念同士の関係やその中核に関する認識が高いとされる、シンボリック相互作用論に基づくストラウス・コービン版のGTA (Grounded Theory Approach) を採用した。

(4) 分析の手続き

具体的な分析の手続きとして、まず半構造化した質問紙によって言語データを得て、親なきあとの不安が生成される過程の言語データを文脈ごとに切片化し、その切片化されたデータからプロパティとディメンションを抽出し、それらの切片に示された単語を使って簡潔なラベルを付ける。ラベルを付ける作業終了後に、反復してその作業を繰り返して抽象度を高めた上で、それぞれの概念の統合化や比較を行い、オープンコーディングを終えた。次にオープンコーディングされたデータをアクシャルコーディングし、得られたカテゴリー同士の関連付けを行い、親なきあとの不安の形成過程を構成したうえで (Figure 1) 理論仮説を立てるセレクトティブコーディングした。

その後、理論仮説を精査するために、オープンコーディング・アクシャルコーディング・セレクトティブコーディングを繰り返し行い、理論的飽和をはかった。

4. 結果と考察

分析の結果、心の病がある当事者とその保護者が抱く親なきあとの不安については、援助者からみた不安の予測も含めて4つのカテゴリーとそのそれぞれのサブカテゴリーが示され、それらの関連図としてFigure 1を示すことができた。また、カテゴリー・サブカテゴリー・ラベル・言語データはTable 3に示した。

心の病がある当事者が抱く不安については、2

つのパラダイムとして整理できたため、ストーリーラインに沿ってその外観を説明する。

(1) 2つのパラダイム

当事者が感じている親なきあとの不安について、親が存命中と落命後のストーリーラインに沿って整理した。

言語データから、当事者が不安を抱く過程において、親が存命中に漠然と抱く親なきあとについての不安と、実際に親の他界を経験した後では、アクシャルコーディングの段階で、【パラダイム1：予測した不安の経験後（プラス）】と【パラダイム2：予測した不安の経験後（マイナス）】といった2つのパラダイム（Table 3）に整理できることが示された。

【パラダイム1:予測した不安の経験後(プラス)】は、親なきあとの実際の生活の中で予測された不安を消化し、自立した生活を楽しむことに移行できたが、【パラダイム2:予測した不安の経験後(マイナス)】では、予測した不安を経験したが、それを上手く消化できずにその後の生活に支障をきたしていることがうかがわれる。

この2つのパラダイムは保護者の不安や支援者からの働きかけにも連動している。そのことも含め、このパラダイムにそって、その概観を説明する。

なお、カテゴリーは《 》、サブカテゴリーは〈 〉、ラベルは[]内に表記する。

(2) 心の病がある当事者が抱く予測としての不安

心の病がある当事者が抱く〈予測としての不安〉は、[日常生活の不安]と[社会的手続きについての不安]から構成されている。保護者の存命中は、こういった日常生活の上での家事や自立支援

医療などの社会手続きを保護者が主体的に行っているため、当事者は漠然とした不安を抱くものの、それを自身で対処するスキルを身に付けるといった行動には至らない場合があることが示唆された。このことから、多くの当事者は、親なきあとについて、それなりの不安は感じているものの、実体験が無いためか、具体的な対処にまで考えが至っていないことがうかがわれる。逆に、保護者が、当事者がリアリティーのある体験が持てるほどに、生活上の様々なスキルについて体験させていない可能性も指摘できる。

(3) 予測した不安の経験後と生活スキルの向上について

〈予測した不安の経験後（プラス）〉と〈経験によるスキルの向上（マイナス）〉は、回収したシートの中で、既に両親が他界したと回答した当事者が、他界する前に抱いていた不安を実際に経験した後に感じたことと、それにより向上、もしくは低下したスキルについて整理したものである。

〈予測した不安の経験後（プラス）〉は、抽出した概念の中で、当事者が不安を前向きと捉えることができた概念である。[慣れにより日常生活が可能になる]とあるように、結果的に一人でやらなければならないなくなり、実際にそれをやった結果、慣れによりできたということであり、慣れなければどうなっていたのであろうという不安を感じる。また、そこには自己効力感の高低と実際に当事者各々が持つ潜在能力の高低も関係しているであろう。

一方〈予測した不安の経験後（マイナス）〉は抽出した概念の中で、当事者が不安を前向きと捉えることができなかった概念である。[なぜやり

Table 3 3つのパラダイム

	パラダイム1：予測した不安の経験後（プラス）	パラダイム2：予測した不安の経験後（マイナス）
状況	慣れにより日常生活が可能になる	なぜやりになる 喪失体験・孤立・トラウマ 新たな依存先の模索 自己効力感の低下
行為	ひとり暮らしを楽しめる 孤立化を防ぐための社会関係 支援者の支援を生活に合わせて利用 一人暮らしを楽しめる	依頼心の増加
帰結	経験によるスキルの向上	スキルの低下

になる]、[喪失体験]などの言葉が並ぶ。

このことから、保護者が存命中から、生活に関わる諸手続きや近所づきあいなどの生活体験を早期に体験させる必要が示唆された。

(4) 当事者が感じている保護者や支援者との関係

まず、当事者が感じる保護者や支援者との関係の違いを整理してみた。

〈専門家から受けられる支援〉は当事者が支援者から受けられると感じている支援の印象を整理したもので、〈親から受けられる支援〉は当事者が親から受けられると感じている支援の印象を整理したものである。

支援者からの支援によって当事者は自身を客観視できているように感じるが、親からの支援に対しては感情が先行してしまい、冷静に受け取られていないように感じていることが示唆された。これは、ある意味当然のように感じる。当事者は保護者を批判的に捉えているだけではなく、[甘えられる]対象としても捉えていることから、保護者に対して甘えによる依頼心と従命的な関係からくる反発というアンビバレンツな感情を持っているからこその印象評価のように受け取れる。

(5) 保護者の思いのストーリーライン

次に、保護者が現在感じている思いと親なきあとの当事者の自立についての思いを整理してみた。〈親の高齢化による不安〉は、保護者が存命中にできる事もしくは、している事を整理した概念である。保護者の加齢からくる体力や経済面、制度の変遷についての理解の限界を理解しつつ当事者を物心ともに支えているように見受けられる。また、わが子である当事者との意思の疎通の難しさも抱えていること可能性も示された。

〈当事者を評価しての不安〉は、保護者が親なきあとを想定して、わが子である当事者が親なきあとまでに身に付けてほしいと願う事柄として整理した。たぶん、最も身近な参与観察者である保護者が、保護者の視点から見ると、社会生活全般にわたってわが子のスキルの無さを案じていることがうかがわれる。

(6) 概念間の関係を整理

(2)～(5)をふまえて、これまで明らかにした概念の関係を整理する。

ここまでで、保護者が当事者の将来を心配して

支援している事を、当事者は反感を持って捉えている可能性があることが示唆された。保護者が当事者の親なきあとを心配するあまり、当事者にはそれが、時として過干渉としてとらえられがちとなり、当事者と保護者の関係の中で当事者の自立に抑止的に働いている可能性があると思われる。

もちろん、総て保護者と保護者の言葉が、当事者が親なきあとに向けて自立する際の抑止効果になっているわけではない。あくまでも、当事者からそう捉えられてしまう場面も存在するということだ。それは、精神障害を持っている当事者とその保護者の関係にだけ現れる現象でないことも、敢えて付け加えておく。

それに対し、専門家からの支援により、当事者は自分を客観視して冷静に受け入れやすくなっている可能性も示唆された。

当事者が親なきあとまでに身につけておくといえよう社会生活のスキルに関しても、当事者と保護者の二者間では、身に付けるための具体的な機会や場面を設定しにくく、双方が漠然とした不安を抱えつつも、具体的な対処のための行動には至らない場合があることも示唆された。

これらのことから、親なきあとに備えて、保護者が健在のうちから積極的に地域の相談機関などの援助者の第三者を親子関係に加え、当事者親子だけの二者間で親なきあとを考えるのではなく、援助者を加えた三者間で計画的に先の事を考えていく必要があるようだ。

加えて、当事者が生活するうえで、保護者が他界する前に抱いていた漠然とした不安が現実化する際に、当事者が自身の生活スキルを向上させて生活を楽しむことができるかどうか、三者間での関係にヒントがありそうだ。

5. 結びにかえて

この研究は、先述したように、「大分精神障害者就労推進ネットワーク」が、心の病がある当事者とその保護者が親なきあとについて考えるきっかけとなるような「親なきあとマニュアル」を刊行するための事前調査として、心の病がある人とその家族の親なきあとの不安を分析したものをまとめたものである。

しかし、この調査にも残念なことに限界は存在

する。

サンプリングの段階から多くの心の病のある当事者やその家族、機関や団体の協力を得て調査を実施することができたのだが、その事を言い換えるならば、むしろなんらかの支援団体や組織、治

療機関と関わっている方々から得られたデータである。そして、半構造化された質問紙を配表留置により回収する方法を選択したため、調査対象者に偏りがあることは否めないであろう。その偏りとは、今回の調査対象者が、①精神科医療機関や

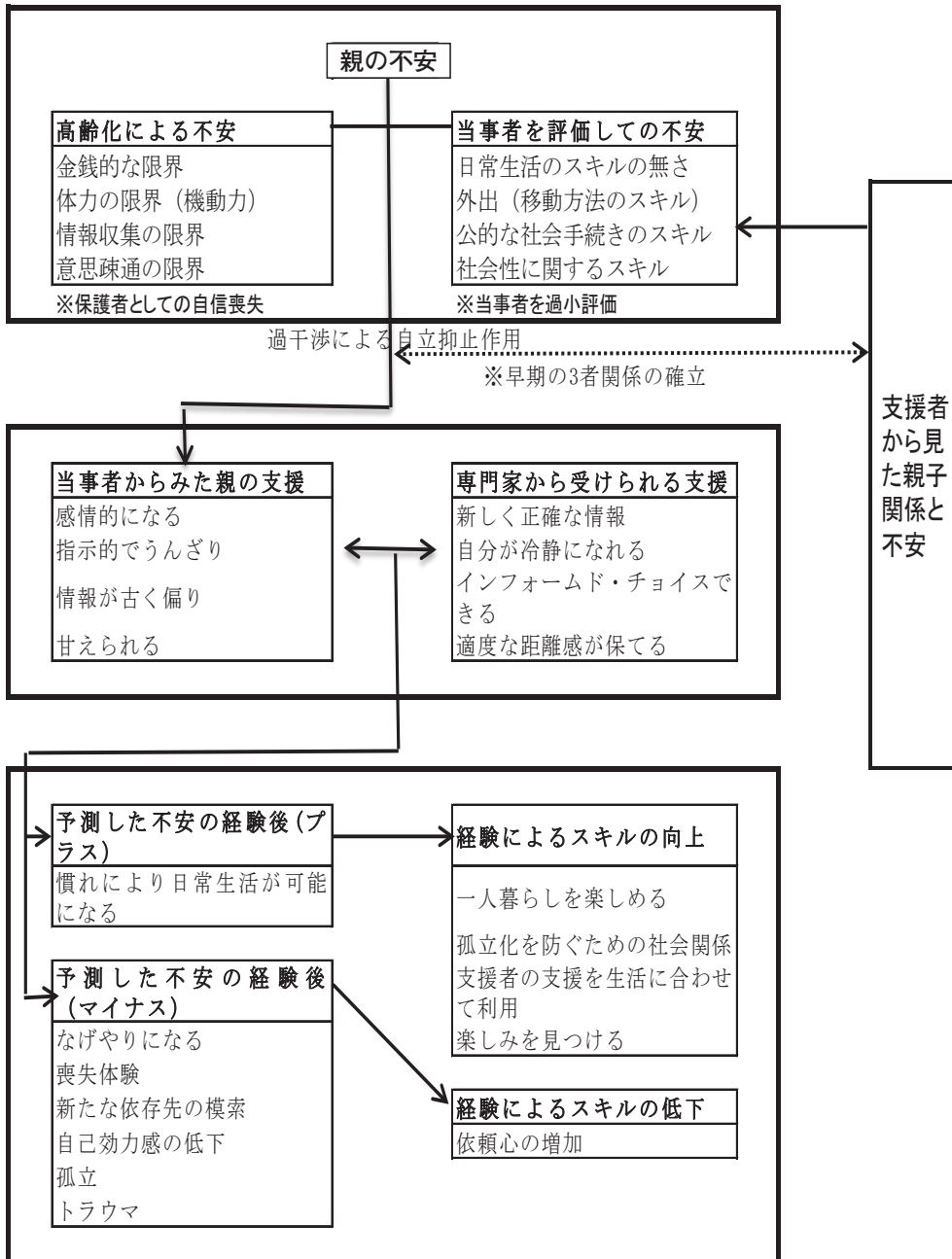


Figure1 心の病がある当事者と保護者が抱く不安の形成プロセス

福祉施設などで日常的に支援を受けていて、社会的に孤立している可能性が低く、②半構造化された質問の意図を読みとり、自身の気持ちを言語化して回答欄に記入できる対象者であると予測される点である。

①の予測が成り立つのであれば、実際の多く親子関係では、この分析結果よりも親子間の関係性において不安が高く、親子関係が膠着している可能性が考えられるため、早期に支援者である第三者が介入して、保護者が健康な段階から親なきあとに当事者と保護者それぞれがより親なきあとを意識する必要があるだろう。

また②については、今回の調査では Table 2 調査対象者の属性に示したように、データとして使用できたのは202枚であり、回収したデータは304枚であった。使用できなかったデータのほとんどは解読不能なものか、言葉の意味を読み取れないものであった。調査に協力していただき、分析者になにかを伝えてくれた方の3分の1のデータを、データクリーニングの際に破棄せざるを得なかったことからデータの偏りと捉えた。しかし、研究の目的からサンプリングの方法を検討すると、半構造化による質問形式は不可避であった。このことは今後の課題として受け止めたい。

Table 4 生成されたカテゴリー・サブカテゴリー・ラベル・言語データ

カテゴリー	サブカテゴリー	ラベル	言語データ
A：親の不安	A1：親の高齢化による不安	A11：金銭的な限界	年金生活になると子どもを養えない 自分たちの老後の生活で手一杯 住宅ローンさえも払えなくなる
		A12：体力の限界（機動力）	子どもの不安定時に対応できない 通院の付き添いさえも負担になった 日常の世話がままならない
		A13：情報収集の限界	新しい制度が理解できない 法改正が何度聞いても頭に入っていない 市役所の説明がよくわからない
		A14：意思疎通の限界	話しかけるとキレられる 話しかけても無視される しつこく言うとうんざりになる 親の言うことは聞かない 施設の職員のいうことしか聞かない
	A2：当事者を評価しての不安	A21：日常生活のスキルの無さ	身の回り事をさせてこなかったからできるかどうか不安 洗濯機さえ扱えない 一人で生活させると何もできなくてすぐに死んでしまうと思う
		A22：外出（移動方法のスキル）	近所の目があるから一人で外出させたことが無い 時刻表が見れないからバスに乗れない 道に迷った時に人に聞けないと思う
		A23：公的な社会手続きのスキル	自立支援医療も手帳の更新もさせたことが無い 回覧板さえも持って行ったことが無い
		A24：社会性に関するスキル	社交性が無いと思う
B：当事者から見た保護者と援助者との違い	B1：当事者から見た親の支援	B11：感情的になる	すぐに感情的になって文句を言う すぐに怒鳴る 同じことばかり文句を言う
		B12：指示的でうんざり	命令しかない 人の話を聞かない

		B13：情報が古く偏り	施設の職員が知ってることを知らない 親の言うとおりに（手続き）したら恥を かいた
		B14：甘えられる	言うとおりにしてくれる がみがみ怒鳴っても、最後はやってくれる
	B2：専門家から受 けられる支援	B21：新しく正確な情報	
		B22：自分が冷静になれる	
		B23：インフォームド・チョイス できる	
		B24：適度な距離感が保てる	
C：当事者の不安	C1：予測した不安	C11：日常生活の不安	ご飯が作れるか心配 洗濯や掃除ができない 家事全般の経験が無い 家の事は全部母親がやってくれてる 今まで家事はさせてもらえなかった
		C12：社会手続きの不安	生活保護の手続きができない 近所づきあいができるか不安 8年に1度回ってくる地区の役員がで きない 手帳の更新や自立支援医療の手続きの方 法がわからない
	C2：予測した不安 の経験後（プラス 効果）	C21：慣れにより日常生活が可能 になる	一人でなんとか生活できる 慣れと実行しかない 親を看病して看取った。悔いはない。今 が楽しい。
	C3：予測した不安 の経験後（マイナ ス効果）	C31：なげやりになる	いずれ一人で生きてゆく、遅いか早いか の問題 自分なんかどうなってもいいと思った
		C32：喪失体験	なんにも身の回りのことができなくなっ た 生きる希望が無くなった
		C33：新たな依存先の模索	親なきあととは兄弟と暮らしたい 親が生きている間に結婚したい 第三者に精神的・経済的サポートの充実 を望む
		C34：自己効力感の低下	
		C35：孤立	誰とも話さなくなった 家に引き込もっていた
		C36：トラウマ	時々、自分でなくなるような症状が出る
	C4：経験によるス キルの向上	C41：一人暮らしを楽しめる	お金の管理、家の管理ができるようにな った 料理が楽しい
		C42：孤立化を防ぐための社会 関係	人間関係をうまく作りたい 一人で死ぬのは嫌だから一緒に暮らす人 が欲しい
		C43：支援者の支援を生活に合 わせて利用	家庭や家族を持つことに関してサポート してほしい
		C44：楽しみを見つける	自分で生活の楽しみを見つけている 地域のサークルに加入した
	C5：経験によるス キルの低下	C51：依頼心の増加	

D：支援者から見た親子関係と不安	D1：親の過干渉もしくは無関心	D11：親の過干渉が自立を抑止	親にいろいろやってもらっていた人は、しっかりと親なきあとを考えないと、どうやっていいかわからないだろう
		D12：親の無関心がスキルを低下させる	当事者に無関心だと、当事者に社会生活のスキルが身につかない 子どもの自立に普段から積極的に保護者がかかわっているのか疑問に感じている
	D2：喪失	D21：親の持つ社会関係の喪失	親を通じての人間関係を失う可能性がある
		D22：経済基盤の喪失	経済的な支援を失う
	D3：計画的な自立支援	D31：支援区分による支援の重要性	親なきあとに当事者を支える存在の有無、特に支援区分の低い人へのケアが重要 支援区分が高いと、入所サービスを受けられない可能性があるから、親が元気なうちからの支援をする必要がある
		D32：行政の支援強化	行政が心の病の大変さを理解して、当事者と保護者の支援にもっと介入すべき
		D33：入所施設の整備	グループホームなどのハード面の充実が急務
		D34支援者スイッチの重要性	病状の安定と経済的安定を中心に、早くから施設でサービスを提供したい 健常者でも親を失うことは不安なのに、精神障害者であればなおさらだと思うので、しっかりさせていきたい 支援区分が高いと、入所サービスを受けられない可能性があるから、親が元気なうちからの支援をする必要がある 支援者も親なきあとを考えると不安になる。当事者の不安を和らげられる支援を支援者も施設も提供していかないとダメ 支援者として、本人に自立を促す支援が必要
	D4：親の他界	D41：社会性の瓦解	心のよりどころを失う可能性がある 心の病で絶対的なのは親子の絆。それが切れるとすれば、社会とのつながりを施設がつなげなおさないといけない コミュニケーションなどの社会スキルが乏しい当事者の親なきあとが心配 親が子どもの自立の阻害要因になっている

引用参考文献

- ① 天谷真奈美・宮地文子・高橋真紀子・瀬戸岡祐子. 「社会的ひきこもり青年を抱える家族の課題認識に関する研究」. 埼玉県立大学紀要. Vol5. 23-32. 2003
- ② 板山稔・高田絵理子・田中留伊. 「精神障害者および精神保健福祉に対する地域住民の思いに関する記述的研究」. 弘前医療福祉大学紀要. Vol4 (1). 25-32. 2013
- ③ 戈木クレイグヒル滋子. 『グランディッド・セオリー・アプローチを用いたデータ収集法』. 新曜社. 2014
- ④ 戈木クレイグヒル滋子. 『質的研究方法ゼミナールグランディッド・セオリー・アプローチを学ぶ』. 医学書院. 2005
- ⑤ 金田重郎・永田健. 「日本語特性に着目した日本語 GTA (J-GTA) の提案」. 電子情報通信学会所報. Vol1. 1-5. 2011
- ⑥ 木下康仁. 『グランディッド・セオリーアプローチの実践』. 弘文堂. 2003
- ⑦ 近藤浩子・岩崎弥生. 「慢性精神障害者の退院支援するグループ・アプローチに関する研

究（第1報）」。千葉看会誌. Vol14 No1. 44-51. 2008

- ⑧ 操華子・森岡崇訳. 『質的研究の基礎 グランディッド・セオリー開発の技法と手順第3版』. 医学書院. 2012
- ⑨ 山本耕太. 「日本の臨床心理学領域におけるグランディッド・セオリー・アプローチ (GTA) を用いた研究の概観」. Rikkyo Clinical Psychology Research. Vol8 57-65. 2014

(2015. 1. 6受稿, 2015. 2. 4受理)

A study of anxieties that people with mental illness and their parents hold after death

Daisuke MISHIRO

Individuals with mental illness and their parents feel anxiety about life after the parent's death. I conducted a semi-structured interview by questionnaire of them and analyzed interview data using the Strauss-Corbin version of GTA. Suggests the need create a relationship between the mentally ill, their parents and an assistant while the parents are still living.

Key words: after parents death, people with mental illness, parents, GTA